

みんなのデジタルリポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

モンゴルの春：人類学スケッチ・ブック

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-02-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小長谷, 有紀 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/4579

8 急場しのぎの乳母ヤギ作戦

第八日め（三月二十三日）

シリントの町を出発するとき、もう午後二時をまわっていた。

本当はもつとはやく出発したかったし、そうする予定だった。しかし、ガソリンを入手するめどがたない、と外事局。町を散歩し、買物をして時間をつぶした。午後二時が、昼食後の昼寝をおわった「昼一番」。道中ふたたびセルゲンの実家にたちよる。ようやくダンゼン家に到着したときは、すでに午後四時。きょうも快晴。ここにやってくるときは、いつも快晴。

しばらくして、モージはゲルをでる。なにか作業をするのだろう。なにをするのか。きょう一日なにがあったのか。それが知りたくてたまらないわたしは、だまってモージのあとを追った。モージは、嫁のセルゲンをつれて石垣のなかにはいる。石垣の広場のなかにヤギの母子が一对いる。さらに、石垣のなかの屋根のある部分にはいる。東、中央、西の三つにくぎられた暗室である。東の暗室にも、ヤギの母子が一对。母ヤギの体格はずいぶん小さい。そのヤギの角は柱にしばりつけられている。

「シュドレンだよ」

とモージがいう。「シュドレン」は「歯のでた」という原義から生まれた名詞。この場合、二歳ヤギをさしている。二歳というのは満一歳のこと。生まれたばかりの時点から子ヤギとよぶ名詞があるのだ



ヤギの角をつかんで実子の匂いをかがせながら乳母とする

から、数え年で考えるのがふつうである。二歳ヤギは、去年うまれたヤギのこと。からだ小さいのも無理はない。もう母親になつたらしい。モージがつづけて解説してくれる。

「ゴロンコイなんだ」

そうか、こいつがそうか。「ゴロンコイ」とは「子嫌い」というほどの意味。嫌うを意味する「ゴロホ」という動詞から派生した形容詞。母でありながら、子の面倒をみないような状態をさしている。

さきほど広場にいた母ヤギが西の暗室につれてこられた。こちらは体格がやや大きい。三歳で、成熟年齢に達している。初産であるべき年齢での、初産である。成熟年齢に達してはいてもやはり初産であることが影響するのだろうか、これもまた「ゴロンコイ」であるという。子嫌い現象がみられるらしい。東の暗室のほうから作業がはじまった。モージが子ヤギを掌にのせる。腹のふくれ具合をたしかめる。乳を飲んでいのかどうかを確認する。どうやら飲んでいられない。小さな母ヤギでもちゃんと乳がでていられない。角がしばられているから、自由に身動きはとれない。そうした物理的援助のおかげで、乳をほしがる子ヤギはどうか哺乳できたらしい。角がむすばれている程度で授乳をこぼさないのだから、子嫌い現象といってもそれほど重症ではないらしい。モージとセルゲレンはこれでもう大丈夫だろうといいながら、子ヤギのために哺乳を補助してやるのだった。

セルゲレンが、小さな母ヤギの角をつかむ。つかみながら、母ヤギをじっとおさえてうごかさない。その母ヤギの下腹部に、モージが子ヤギをあてがってやる。子ヤギはクイクイ哺乳しはじめ、母ヤギはみじろぎもせずに授乳をはじめ。そのあいだ、モージはずっとかけ声をかけつづける。

「チャイグ、チャイグ、チャイグ……」

西の暗室でも、やはり同様に哺乳を補助した。セルゲレンは、母ヤギをつかまえる。背中あたりにをわしづかみにする。そして、全身で母ヤギのからだを壁におしつける。じっとしてうごかないところへ、



暗室の中で乳母ヤギと子ヒツジたち

モージが子ヤギをあてがう。子ヤギはクイクイと哺乳して、母ヤギはじっと授乳する。やっぱりモージは、

「チャイグ、チャイグ、チャイグ……」

チャイグというのは、母ヤギから嫌われた子ヤギのために、哺乳を補助するときの、特定のかげ声である。チャイグとよびかける哺乳補助作業を、モンゴル語では「チャイグラハ」すなわち「チャイグする」という。けさも同様の作業をしたのだろうか。

けさ、宿営地付近にやすんだ群れのなかで、ヤギが三頭出産していた。ダンゼン一家のもとへやってきてから、はじめての出産であった。北家の宿営地にとって、今春最初のヤギの出産であった。ヤギの出産は、ヒツジの出産に先行する、といわれる。ヤギがうみはじめたことは、いよいよ出産シーズンはじまったことを物語る。

出産していた三頭のヤギのうち二頭は、群れが放牧に出発するとき、子ヤギをのこして群れの移

動についていこうとした。それが、暗室にいれられていた先の二頭である。

群れの移動についていこうとしたことから、牧民たちはただちに、この二頭の母ヤギがいわば母らしくないと判定した。母になったにもかかわらず、母であろうとしない。実母実子関係の認知がよわい、と判定された。それが「ゴロンコイ」である。実母実子関係の認知を確立するために、二頭だけの空間を提供する。いわゆるベアリングがおこなわれた。それだけではない。実母実子関係の認知が十分に確立されていないから、子のために哺乳を人が介添した。実子に対する母の認知をうながそうと、母ヤギに「チャイグ、チャイグ」とよびかけた。まず母子というベアのみに隔離して、さらに哺乳を介添し、同時によびかけるといふ作業。実母実子関係がよわいときに、こうした一連の作業が発生する。

哺乳の介添作業をしながら、モージは、

「ヤギなんてこんなもんさ」

とはきすてるように言った。

一般に、初産の場合、実子を認知しない現象「ゴロンコイ」が発生しやすい。乳房にくらいつこうとする実子に対して、頭突きをくらわせたり、足蹴りをおみまいする。ましてや未成熟段階での初産ならなおのことである。ヤギはヒツジにくらべて未成熟出産が多いといわれる。その結果、ゴロンコイの発生もヤギのほうがヒツジにくらべて多いことになる。そのあたりの事情を総括して、モージは「ヤギなんてこんなもんさ」と断言するのである。

初産だからしかたがない……そう大目にみてやってもよさそうなものだ。しかし、モージの断言にはそんな容赦がはいりこむ余地はなかった。

ゴロンコイという事態が発生すると、女たちはいそがしくなる。哺乳・授乳をめぐる一連の作業を毎

朝、毎夕おこなわなければならぬ。実子をしっかりと認知しているヒツジ・ヤギなら、人が介入せずとも授乳する。母であることを心得ていないから、こんな厄介な作業をしなければならぬ。「ヤギなんてこんなもんさ」という断言は、母であることを心得ない厄介なものへの叱責があるようだった。

モンゴルには、実子の認知をうながすため、母メスに対して歌をうたうという伝統的な技法がある。モンゴルには、即興のメロディに即興の詩をのせてうたう。母ヒツジに対しては「トイグ、トイグ」とよびかけ、母ヤギに対しては、「チャイグ、チャイグ」とよびかける。母となった家畜の聴覚にうったえて、母であるようにしむける。それが、実子認知をうながすときの、モンゴルの伝統的なやりかたであった。モンゴル語で「とらせる」と表現される。「子とらせ作戦」である。ヤギへの作業は「チャイグする」、ヒツジへの作業は「トイグする」と、よびかけ声によって区別される。

モージのチャイグには歌詞がなかった。命令的な低音の一本調子で、メロディさえもないといえた。彼女の子とらせ作戦にとつて、チャイグ、チャイグというよびかけはまったくの添え物にすぎない。情緒にうったえる方法とは思えない。むしろ、ペアリング効果のほうが大きかったようである。そもそも軽症の子嫌い現象だったようである。あえて哺乳の介添をしたのは、きのう母なし子ヒツジが発生したためかもしれない。じつは、子ヤギたちが人に介添されて哺乳したあと、こっそり子ヒツジも哺乳をゆるされたのである。

それは例の子ヒツジたち。母をなくした二匹の子ヒツジたちである。チャイグ作業のあと、二頭の母ヤギはそれぞれ別の暗室で、子とペアの二頭つきりになった。そこへ母なし子ヒツジがはこばれてきた。一匹ずつ、哺乳を介添してもらうのだ。

モージは母ヤギの角をつかみ、全身で母ヤギのからだを壁におしつける。おさえつけられた母ヤギのそばに、子ヤギがやってくる。実の子である。子ヤギはまたもや哺乳の介添をもらっている、と思



みなし子ヒツジ

においをかがせない
(実子がいないとき)



乳母ヤギ

においをかがせる
(実子がいるとき)

図6：乳母畜への対応

いこむのだろうか。モージは、角をうまく誘導して、母ヤギに、実子の匂いをかがせるようにしむける。そこへ、飢えた子ヒツジ登場。脇からさっとヤギの下腹部にもぐりこみ、グイグイと哺乳する。そのとき、母ヤギはどう考えているのか知らない。実子の匂いをかいでいるから、実子へ授乳しているのだと錯覚しているかもしれない。しかし、正確にいうと、実子の匂いをかいでいるのではなく、かがされている。だから、人間の詐欺行為をちゃんとみぬいているかもしれない。いずれにせよ、みなし子ヒツジの哺乳が成立した。ヤギがかりそめの乳母になった。

もういっぽうの子ヒツジは、実子のヤギと一緒に、二つの乳房を一つずつわけあった。母ヤギをおさえると、実の子がまず下腹部にもぐりこんでしまった。そのあと、子ヒツジがヤギとならんで哺乳する。子ヒツジのほうが母ヤギの鼻面に近いほうにならんでいる。子ヤギのほうが、お尻に近い位置にいる。これでは、実の子の匂いをかがせるという詐欺が成立しない。母ヤギをおさえていたセルゲレンは、脇で母ヤギの顔を向こう側におしつけた。

母をなくした二匹の子ヒツジたちは、こうして、この日はじめて乳母を知ったのである。二匹の子ヒツジたちはと

もに、黒のぶち模様。きのう哺乳びんをいやがったほうは、鼻面が黒い。黒の毛がおおい。これをかりに黒鼻とよび、他方を白鼻とよんでおこう。黒鼻は、朝から、乳母をしたててもらったらしい。白鼻は、とりあえず朝は哺乳びんで飲み、夕方はじめて乳母にあてがわれた。

きょう乳母になった母ヤギたちは、そもそも乳母としてのぞましい個体ではないように思われた。実の子との認知関係さえよわいような母が、乳母として二重の役をはたせるとは思えない。しかし、ほかに代わるものがない。そこで、とりあえずの、急場しのぎの乳母である。

急場しのぎの乳母ではあったが、乳母として好ましい条件がないわけではない。ヤギはヒツジにくらべて、乳の出が多い。とくに出産直後は乳の出が多い。全部飲んでしまうと子が下痢をするほど多い。そして、より興味深いことは、もう一つの理由。実子への認知を確立するという介入作業と連続して乳母にしているということである。実子への認知がままならないとして、人は実子への授乳をすでに介添している。乳をめぐって、母子関係に介入している。母になったメスにとって、授乳は、しなければならぬ自然な行為である。これを援助するうちに、メスは授乳時における人間の介入というものに慣らされていくのかもしれない。

実の子への授乳の介添から、実の子ではない子への授乳の介添へ。そして、やがては子の介在しない授乳すなわち搾乳へ。人間が家畜化の過程において搾乳をはじめた契機というものは、乳をめぐる最初の介入、すなわち子育てのための母子関係への介入のなかで発生したにちがいない。出産期における母子関係への介入には、搾乳という技術の成立契機となったシーンをかさねることができるかもしれない。搾乳は、去勢とともに、牧畜という生業が成立するうえで重要な画期となった二大技術である、と一般に理解されている。これらの技術の重要性はうたがえない。ただし、搾乳の成立契機を考察するうえで、搾乳のシーンよりも、搾乳以前のシーンがより重要となるのではないか。すなわち出産期にお

ける介入、ひいては子畜育である。とりあえず、養育とよんでおこう。

養育技術ないし技法はこれまで等閑視されてきた。養育は、ペットの飼育にも似て、群れで放牧することと本質的に相反すると考えられていたからである。しかしながら、野生の群れをやがて家畜の群れへと変えていくプロセスにおいて、人がつかんだ契機は出産時の養育だったかもしれない。群れで放牧するためにこそ、養育が重要な意味をもつかもされない。少なくとも、モンゴルには、洗練された養育技法が蓄積されている。歌をうたうことをしてまで子育てに専念する文化的入念さがある。搾乳がメスに対する技術であり、去勢がオスに対する技術であるならば、第三の技術として子に対する養育を重視しておきたい。それが、モンゴルにおける遊牧の特徴を考察し、また家畜化過程を推測するうえで、刺激的な材料を提供してくれるのではないだろうか。